アイデンティティー

W校　中等部三年二組
那須　咲代

私は急にハッとした。ここは決して私の故郷ではない。空気まで違う。だが、生まれて初めて、私の周りの人すべてが自分と同じ肌の色だということに気がついたのだ。

「ビッビー」クラクションが鳴った。すると、約十台の車が競い合うかのようにクラクションを鳴らし、耳障りな音が響いた。背中に赤ちゃんをおぶった若い女性が赤信号になった途端、水を売ろうと車の窓をノックしながら車の間をぬって歩いている。車線を全く無視して走って来たオートバイには、ヘルメットをかぶった男性とその後ろに横向きに座った女性が乗っている。まるで映画のようだ。思わず鼻筋にしわを寄せたくなるような臭い空気。湿気の多い日本の暑さとは全く違う、もわっとした熱気。二〇一八年八月。私はインドに居た。

インドに父方の家族が住んでいるため、私のインド訪問は無論初めてではない。でも、インドに行く度に、「私は外人だな」といろいろな場面で思い知らされ、私はどこかヘテレポートして消えてしまいたいような気持ちになっていた。家族でさえ、気付かぬうちに英語の会話にヒンディー語を混ぜ、ヒンディー語を知らない私には何が起こっているのか全く解らないこともあった。皆の味付けは辛すぎて私には食べられない物も多かった。インド育ちでない私の体は、ミネラルウォーターしか受け付けない。そしてインドは、女性や同性愛者の権利を認めない保守的な文化だ。女性は行動や服の選択枠が制限される。私は、そんなインドの一員ではないと思っていた。

私の父はインドで生まれ育った。大学院の時に渡米したが、インドで空軍の少将をしていた祖父が亡くなるまで、父はインド国籍だった。現在父は、自分の子供達と同じアメリカの国籍を持っている。しかし、父のインド人と

してのアイデンティティーはとても強く、父は、まだ自分をインド人だと思っている。私はインドの血を受け継いでいるが、インドは私の居場所ではなく、私のアイデンティティーはインド人ではないと思い込んでいた。

私は通常、自分だけ肌の色が違う状況に慣れている。ニューヨークでは、私は白人が九十パーセント以上のフレンチアメリカンスクールに通っている。一人だけ肌の色が濃い私は、学校で撮るクラス写真では毎年変な色に写っている。毎夏日本へ行くと、私は、

「日に焼けていい色。もう海に行ったの。」

と聞かれる。日焼けしたのではなく、私の生まれつきの肌の色は普通の日本人より濃いのだということに、誰も気が付かないようだ。でも今回、私にはあまり関係がないと思っていたインドの地で、周りの人が皆自分と同じ肌の色だという全く想像した事もない状況に置かれ、私は驚嘆した。

インドでは、従兄弟姉妹を「きょうだい」と

呼び、本当の兄弟姉妹のように近い関係にあるが、遠くインドに住む従兄姉弟達を私は今までそんな風に思えなかった。しかし、今年の夏、私は四人の従兄姉弟それぞれと時間を過ごし、繋がりを見いだす事が出来た。

一番上の従兄、二十五歳のアカーシュ・バイヤ（兄）は私と似ている。アカーシュ・バイヤも読書や書いたりする事が大好きだ。勤勉で穏やかで少しお茶目なアカーシュ・バイヤと私は性格的にもそっくりだ。

プリティカ・ディディ（姉）は、皆強く意見を言うインド社会で、怖じ気づいてしまう少し内気な私に、きちんと自分の意見を表現していいのだと教えてくれた。プリティカ・ディディは長女である私がずっとほしかった姉のように、多くのアドバイスをくれた。

アユーシュは私より一歳年上だ。私達は全く違う人生を歩んでいるが、お互いを良く理解し、共に笑い、長時間会話を楽しんだ。ずっと一緒にいても飽きず、彼は私にとって友で

あり同年齢の兄弟のような存在になった。
私より二歳半下のアヤーンはとても優しい。いつも私達がヒンディ語が分からないだろうと英訳してくれた。私の弟、藍貴が一人にならないようにいつも一緒に遊んでくれた。彼といると、私は思わずにっこりしてしまった。

環境は全く違うインドで生活していても、従兄姉弟たちは、私が今までイメージしていたインドの凝り固まった保守的な考え方ではなく、私と同じような考えを持って生きていた。知り合って行くうちに私はそれぞれの従兄姉弟が、私自身の違った部分を持っている分身のような気がした。私の中で、彼らは遠くに住む従兄姉弟ではなく、兄姉弟になった。

今年のインド滞在はたったの二週間だったが、私は自分の中のインド人を見つけた。今までの私は、自分は父を通してだけインドと繋がっていると思っていた。でも、それは違う。これからの私はもう自分の中にある「インド」

を否定しない。

核兵器の怖さを知って

LI校　中等部三年一組
猿見田　美星

「七十三年前、ここで一瞬のうちに十四万人もの人が死んだんだ」

原爆ドームと平和記念資料館に向かう途中、周りの風景を見ながら思いました。母がずっと前から、広島に私と妹を連れて行きたい、日本人として見て理解しておかなければいけないものがある、と言っていたので、今日見るものは日本人として一生忘れずに憶えておかなければならないのだと思いました。

私は、広島に来るまで、あまり広島や長崎に落とされた原爆の事を知りませんでした。学校でも第二次大戦については、ほとんどは日本がパールハーバーを攻撃した事の方に集中して勉強し、原爆について習ったのは、起こった日付と死亡者の数くらいで、実際に広島や長崎の人や街にどうゆう影響を与えたかは習いませんでした。パールハーバーで燃えてい

る軍艦の写真や動画は見せられても、広島の写真は、爆弾を空から撮ったものしか見せられなかったのです。何故あまり学校で広島の原爆の事をやらないのかは、きっと原爆はアメリカが落とし、あまりに大きな被害を与えたので、その事については触れたくないのだと思います。毎年の様に学校でこんな事を繰り返しているうち、母が言っていた日本人として知ってほしい、知らなければならない事がどんどん知りたくなりました。広島で一九四五年八月六日、午前八時十五分に何が起こり、それによってどのような事が引き起こされたかを母は知ってほしかったのです。

広島に着くとまずは原爆の落ちた爆心地に行きました。爆心地には小さな写真と説明書きのある碑しかなかったので、それと知らない人は通り過ぎてしまいそうなものでした。写真ではがれきの山が写っていて、この上空で原爆がさく裂したのかと思うと胸が一杯になり、亡くなった人が天国で幸せでいられる

ようにとお祈りしました。次に原爆ドームを見に行きました。ドームはほとんど壊れて、壁も崩れ落ちてはいましたが、周りが廃墟と化した中、よくこれだけ残ったものだと驚くと同時に、少しずつ頭の中でその時のイメージが浮かんで来ました。広島に来て、最も衝撃的だったのは資料館でした。破れた服や黒こげになった三輪車、八時十五分で止まった時計、また全身やけどで顔も性別も分からなくなってしまった人、黒い斑点が全身に浮き出た人、来ていた服の模様が肌に映ってしまった人の写真と共に家族の手記が展示されていました。展示を見ていた多くの人が涙を流していて、一つ一つ展示されている物に時間をかけながら進んでいました。資料館を出る頃には、あの時の状況が目に見えて来る様でした。今いる街がこんなだったかと思うとあまりのショックで言葉もありませんでした。

私はこの夏、広島に行って今まで漠然としか知らなかった、核兵器の恐ろしさを良く知

る事が出来ました。二〇一六年五月にオバマ元米国大統領が広島を訪問した時、戦争中、日本に苦しめられた国の政府は、日本が自分を被害者だと見せつけようとして、自分達がやったことをうやむやにしようとしているのだという声明を発表したりしました。しかし日本が原爆の事を話すのは被害者面をしたいからではなく、核兵器の本当の怖さを知っているからこそ、今も核兵器を製造している国にその残酷さを伝え、製造を中止させようとしているのです。核兵器の本当の恐ろしさを知れば、核保有国の核政策もきっと変わって来る事でしょう。私も核兵器の怖さを知った日本人として、核兵器の恐ろしさを伝え、廃絶を訴えて行きたいと思いました。広島と長崎で起こった悲劇が二度と繰り返されないようにと心から願っています。

優しさの中で

W校　中等部一年二組
ウォーカー　美咲

「あげる」と「ゆずる」は、同じような意味の言葉。けれど、二つの違いを理解できた今年の体験入学は、今までとは違う。初めて日本の中学校を体験しただけでなく、二週間の間に、日本人ならではの優しさや心遣いを、何度も何度も、感じる時があった。

給食は、大好きな日本食が食べられる時間。お肉やお魚、デザートがあまると、欲しい人はじゃんけんをして、勝った人がもらえることになっている。負けず嫌いな私は、運まかせなじゃんけんが苦手で、たいがい負けてしまう。それでも、十六人近くとじゃんけんをした時、私と男子が最後の二人に残った。その子はじゃんけんに強く、私はもう負けると思いながら、その子の前に立った。すると、その子は突然、

「ゆずる。」

と言った。私が考える間もなく、その子はパッと振り返り、自分の席に戻った。私は今、何が起こったかを考え、遅れて
「ありがとう。」
と言った。「ゆずる」そう言えば、普段使わない言葉だ。そして、次の週も、似たような事が起きた。
体験入学最後の日、理科の授業で、「べっこうあめ」を作った。作るためには、ガスバーナーを使う少し危ない実験だった。作る前から楽しみだったし、作っている間も最高に楽しかった。私の班は４人だったので、一つの平べったいあめを分けるのは簡単だと思っていたら、大間違い。あめを割ろうとした班長さんは、きれいに分けられなかった。これは班長さんのせいではなくて、あめを割ろうとすると、ガラスのようにピキピキッとヒビが入り、四等分に割れず、大小出来てしまった。他の班は、じゃんけんで、誰がどれをもらうかを決めていた。私もてっきりそうするかと思って、じ

ゃんけんをする準備をした。けれども、私の班は
「宇多美咲ちゃん、最初に選んでいいよ。」
と言ってくれた。私の中では、大きいのが欲しいなと思ったけれど、そんなことをしたら、自分勝手なので、小さめのあめをとろうとした。すると、
「それ私の。」
と、止められた。違うのを取ろうとすると、今度は、
「宇多、それ僕の。」
と、また止められた。最後に残った二つのうち、一つを取ろうとしたら、
「美咲ちゃん、それ私の。」
と、私のことを止めた。え、何で？　最初に選んでいいよと言ってくれたのに、何で。　一瞬ひどいと思ったけど、すぐに分かった。班の友達は、遠慮していた私の事を知っていて、私に一番大きなあめを残してくれたのだ。ひどいんじゃなくて、その正反対、とても優しかっ

た。決して直接的じゃない優しさ。誰も相談したわけじゃないのに、その場で、みんながお互いに何をするのかが分かっていた。同じ場面で、アメリカだったら、早い者勝ちのように、それぞれが欲しいのを取って、小さいのを取った人に、「Too bad.」と言うと思う。

「あげる」と「ゆずる」では、意味が全然違う。「あげる」は、「やる、与える」を丁寧語に変えているだけ。「ゆずる」は、自分のことは後にして、他の人のことを想っている言葉。つまり、「ゆずる」は、気持ちの込もった心からの言葉と行動。日本人らしい、良い言葉だなと思う。言葉の意味を、こんな風に考えたのは、初めてかもしれない。

そして、私の担任の河内先生は、本当に良い先生だった。私の体験入学が良くなるように、話す機会を毎日作って下さり、同じ学年だけでなく、たくさんの生徒や先生方を紹介していただいた。部活を見学する時は、先生はわざわざ許可を取りに走って、暑い日は室内で

やる部活、少し涼しい日は外でやる部活に入れて下さり、先生は、

「暑いですが、大丈夫？」

と、すぐに聞いてくれた。注目を浴びてしまう私のために、毎朝待ち合わせて坂道を一緒に登ってくれた友達、毎日坂道を一緒に降りて見送って下さった先生。小学校の時とまるで違うドキドキの中学校体験入学は、友達や先生方の「優しさの中で」、最高の思い出になった。

グレープフルーツ

L一校　六年一組

マ　笑里

あなたは、いつ幸せを感じますか。当たり前の事を当たり前にできている時ですか。寒い冬に温かい布団で眠る時ですか。私は、愛してくれる人がいると気付いた時でした。

私は申し訳ない事をしてしまった。ムーンフェスティバルのお祝いで、レストランでの食事中、祖父がくれた大きなグレープフルーツを出して遊んでいたら落としてしまい、となりのダイアナおばさんのスープをこぼしてしまった。私は母にしかられ、みんなを不愉快にしてしまった。その後、もうお腹がいっぱいだと言って、しばらく気まずい空間で大人しく座っていると、母が、

「せっかくのお祝いのごちそう、食べないと失礼よ。おばさんに申し訳なくて、胸いっぱいなのは分かるけど、おじいちゃん達のためにも、もっと食べなさい。」

20×20

と言った。おばさんも気にしないでと優しくしてくれた。優しくされて、私はついつい泣き出してしまった。突然の涙に、みんなの視線が私を向く。年下のいとこ達や、妹達がなぐさめに来る。一生けん命私を笑わせようとする。まだ二才にもならない妹の寛菜まで私によしよしと背中をなでてくれる。祖父母も私の涙を止めようとしてくれる。みんなから伝わる優しさが私を包む。その感覚が愛しくて、私の涙は止まらない。妹といとこの悪ふざけが可愛くて、笑う。うれしくて、楽しくて、でも少し申し訳なくて、私は笑い泣きをする。大粒の涙を流しながら、私を心配してくれるみんなの顔を見る。私は、けん命に私をなぐさめてくれる家族の愛に包まれていた。

私にとって幸せとは、誰かに愛されていると感じられる事です。みんなに愛されまくった夜に食べたグレープフルーツは、今まで食べた中で一番甘かったです。

ピンクの手帳

L工校　六年一組　イスラス　葉

夏休みに日本のおじいちゃん、おばあちゃんの家に遊びに行きました。その時、おばあちゃんがピンクの手帳を見せてくれました。何かと思って見たら、表紙に「ひばく者健康手帳」と書いてありました。おばあちゃんは、たまに戦争の時のことを話してくれます。この夏もまた、おばあちゃんから原ばくの話を聞きました。

「二才だったから、全然覚えてないんだけどね」。

と、おばあちゃんは話し始めました。

七十五才のおばあちゃんは、二才の時広島で原ばくにあいました。ピカッと光り、たんすが目の前でたおれてきて、下じきになりそうになりました。まどがラスが割れ、トイレに行く前だったので、おしりにガラスがささったそうです。ピンクの手帳には、どこでひばくしたか書いてありました。この手帳を持

20×20

っていると、ひばく者だという証こになるそうです。おばあちゃんの親せきや家族が、広島の原ばくで十人七くなったそうです。

ひいおじいちゃんはばく心地から一・五キロの所にいました。熱で洋服に火がついてやけどして、その後ケロイドになったそうです。

前に広島の平和公園に行ったことがあります。折りづるで有名な佐々木さだ子さんは、もし、今生きていたら、おばあちゃんと同じ年だそうで、おばあちゃんの友達と小学校で同じクラスだったと聞いておどろきました。

七十三年前、広島と長さきに一発ずつ原子ばくだんが落とされて、一しゅんのうちに何十万人もの人が七くなりました。その時原ばくにあって生き残った人は、どんどん年をとって七くなっているそうです。

おじいちゃんの戦争の話も聞きました。ひいおじいちゃんはけい察官で、いつも仕事で家にいなかったので、空しゅうけい報が鳴ったら、ひいおばあちゃんと弟や妹たちと、甘

20×20

まい防空ごうへにげていたと言っていました。

去年の十二月、現地校の授業でパールハーバーのビデオを見ました。クラスの子のひいおじいさんが、パールハーバーのこうげきの時いて、生き残ったと話していました。私はショックでした。

「ジャパン、ジャパン」。

と、ビデオの声が言う度に頭にひびきわたりました。パールハーバーは昔のアメリカ人と日本人の話で、私には関係ないとずっと思っていました。でも、友達のひいおじいさんがそこにいたと聞いて、関係なくはないと思い始めました。もし、ひいおじいさんがその時死んでいたら、その友達は今、ここにいないかもしれません。

最近、日本語のテレビで「この世界の片すみに」というドラマを見ました。主人公のすずは、戦争で右手がなくなり、広島の家族が原ばくで死んでしまう話です。ドラマを見ると、戦争や原ばくのこわさがよく伝わってき

ます。

友達のひいおじいさんのパールハーバーの体験や、日本のおじいちゃん、おばあちゃんの戦争の話を聞いて、平和についてもう一度考えてみました。私の父はアメリカ人で、母は日本人です。七十三年前まで、アメリカ人と日本人が、ばくだんを落としておたがいに殺し合っていたなんて、信じられません。

世界には、広島の原子ばくだんよりもっと強力なかく兵器が、一万五千個くらいもあるそうです。かく兵器を使ったら世界はどうなるか考えたらこわくなります。かく兵器をロケットにのせて、宇宙のずっと遠くに全部捨てたらいいのにと思います。日本は原ばくを落とされた、世界でたった一つの国です。広島、長崎の体験をみんなに伝えて、戦争やかく兵器のない世界になるよう、うったえていかなければなりません。

この夏、おばあちゃんに見せてもらったピンクの手帳のことや聞いた話を、ずっと覚え

5

ておきたいと思います。

20×20

家族みんなが頑張った時間

L工校　五年　二組
高橋　健

「健、自分で起きて、ゲームばかりしないで勉強を一生懸命頑張れる？」

と、お父さんとお母さんが夕飯を食べている時に言いました。ぼくは朝起きるのが苦手で、ゲームしているつとは多くて、いつもおこられていたけど、なんで急にそんなことを言うんだろうと不思議に思いました。

お父さんがその理由をゆっくり話してくれました。宮崎県にいるおじいちゃんが、じんぞうの病気で、おじいちゃんを助けてあげるために、お父さんのじんぞうを一つおじいちゃんにあげる手術をするために、日本に行かなければいけないということでした。そのために、お母さんもいっしょに行くから、僕は二ューヨークに一人で残らなければなりませんでした。ぼくは、お父さんとお母さんの友達の

じゅんちゃんと二ューヨークに一人、残ることになりました。

じゅんちゃんは、ぼくが生まれる時もいてくれた、すごく長い付き合いの友達だけど、お父さんとお母さんがいないことを考えると、とてもさみしい気持ちになりました。でもぼくは、泣かないで頑張ろうと決めました。

お父さんとお母さんが日本に行っている間、毎日電話しました。いつもはあまり話さないこともたくさん話しました。

「じゃあね、健、また電話するね。」

と、お母さんが電話を切った後、いつもさみしい気持ちになったけど、泣かないと決めたから、ぼくは泣きませんでした。

三月十四日、おじいちゃんとお父さんの手術は成功しました。手術が終わって、しばらくしてお父さんとお母さんがニューヨークに帰ってきた時、ぼくは本当にうれしかった。家族がみんなが一緒にいるのは、いいなと思いました。

ぼくは、お父さんのおなかを見て、とてもおどろきました。お父さんは、おじいちゃんにじんぞうをあげたので、おなかを切っていたのです。すごく痛そうだったし、お父さんは、

「痛いからぶつかったりしないようにね。」

と言いました。

ぼくはとてもさみしかったけど、泣かないで頑張りました。でもお父さんが一番頑張ったし、ぼくよりも頑張ったんだなあ、やっぱりぼくのお父さんはすごいと思いました。そしておじいちゃんも、

「元気になったよ、ありがとう健。」

と言ってくれました。

おっこられたりすることもあるけど、今は朝起きると、お父さん、お母さん、弟が家にいます。家族がいっしょにいるって大切なことだと思います。家族や人に助けが必要な時は、ぼくはお父さんみたいに助けてあげられる人になりたいです。あの時、家族みんなが頑張

20×20

っ
た時間を、ぼくはず っ と忘れないでおこう
と思います。

20×20

友達、家族、戦争と平和

L工校　五年一組
檳原　尚紀

ぼくの友達でお父さんがいない子がいる。去年まで同じクラスだった。気が合ってよく一緒に遊んだ。名前はマネーと言う。やさしくて、頭がよくて、ユーモアがある。キンダーの時から五年間一緒だった。ぼくとマネーは、サッカーが大好きで、休み時間には必ず外で一緒にサッカーをして遊んだ。

三年前のある日、マネーが言った。

「ぼく、お父さんいないんだ。」

ぼくはおどろいて、ボールを足で受けとらなかった。

「うん、そうなんだよ。ぼくのお父さんは、イラク戦争に行って死んでしまったんだ。」

それを聞いて、ぼくは石でうたれたような感じがした。それまで、世界中のみんなは幸せで、悲しむことなく生きていられると思っていた。マネーはつらそうだった。ぼくは、う

ちで弟とけんかをして悲しくな「た」ことはあ「った。でも、こんな悲しみは、感じたことがなか「った。お父さんがいないという事は、どういうくらしなんだろう。三年た「た今でも、マネーのつらさと悲しみは、ぼくの心に残「ている。そして、これからも、忘れたくないと思う。

ぼくの家族は、家族全員そろ「ていて一しよにくらせて幸せだな。ぼくのお父さんがいない毎日なんて想像できない。マネーのお父さんのことを教えてもらうまで、周りのみんなも、幸せに生きていると思「ていた。でもちがうんだ。この世界は、そんないい所ではないんだ。本当はこわい所なんだということが、この三年間だんだんと強くと感じられてきた。

以前は、小さな失敗や問題があ「てちょ「っぴり悲しくな「た時、僕はベッドルームに、とじこも「ていた。例えば、算数の問題がとけない時とか、お母さんや先生におこられた

時だ。　ぼくは、不運だなとか、もう学校へは行きたくないなあと考えた。でも、そんなちっぽけなことは、マネーのつらさや悲しみとは比べものにならない。だから、挑戦したり、すこしがまんすればいい。

こういうことを考えているうちに、一つとても重要なことに気が付いた。それは、家族の大切さだ。どんなつらい目に合っても、家族はそれをいっしょに乗りこえて行くんだ。悲しいことも楽しいことも、いっしょに生きていくのが家族だ。だから家族は、人生の中で一番大切なものなんだ。

ぼくは、マネーのつらさを感じて、大きくなったら戦争で困っている人々を助けたいと思うようになった。そして、マネーみたいな子供達を元気づけてあげられるような仕事をしたいと思っている。この考えは、自分だけじゃなくて、ぼくの家族と未来の僕の家族にも知ってもらいたいと思う。だからここに書き残したい。ぼくは勉強をしっかりして、世

界を体験して、困っている人々の役に立ちたい。世界をもっといい所にしたい。そんな夢がかなえられたらいいと思う。それには、毎日少しずつ努力をすることが必要だと思う。

戦争は、この世界の最悪の問題だと思う。戦争で人々が殺し合い、家族がはなればなれになって、貧しさやきずで苦しむ人がたくさん出る。ぼくのそんけいする人の一人は、イランドの経済学者のアマルティア・センだ。アマルティア・センは、貧しさや人間の安全保障について書いた。例えば、「貧困、戦争と平和」というう文は、ぼくにインスピレーションをくれた。ぼくも、アマルティア・センのように経済学を学びたい。そうすれば、戦争やきがや貧しさをなくすことを助けることができると思う。

今年の秋、マネーと家族は、セルビアに引っこして、マネーは転校してしまった。マネーのお父さんがアメリカ軍隊に入ったわけの一つは、アメリカ合しゅう国の市民権を取る

20×20

ためだった。でも、それを取らないまま、命をなくしてしまった。そして、マネー達は、亡くなったお父さんの故郷であるセルビアに行ってしまった。

マネーは今、何をしているかな。新しい学校はどうかな。ぼくのことをおぼえているかな。これから、いい友達がたくさんできるといいね。ぼく達が大きくなったらまた会いたい。その時、何の仕事をしているだろう。おたがいにがんばって、家族と友達を大切にしよう。また会えるのを楽しみにしているよ、マネー。

20×20